

伊賀別筆

Iga Beppitsu

漫才御意見無用

伊賀別筆
付録雑誌
第1号

謎の
おんどりや
怪人雄鶏屋ほんだわら

責任
編集

耳寄りなお知らせ

この付録雑誌には「手前どもはなに

も考えさせていただかないことにさせていただいておりま
す」「手前どもはできるだけ働かさせていただかないよう
にさせていただいております」という決めぜりふでおなじ
みの名張市役所のみなさんが「なばりしは やくざに や
さしい まちづくり」「おやくしよは みうちに やさし
い しみに きつい」と名張市立名張小学校のよい子た
ちからわかち書きでおちよくられつつも謎の怪人雄鶏屋ほ
んだわら（匿名希望）に「おんどれやあほんだらおんどれ
やあほんだらおんどれやあほんだら」と叱り飛ばされる爆
笑漫才が掲載されています。どうかしてゐるぜまったく。

創刊兼終刊号

戻ってまいりました

やあ。伊賀地域十八万人のすつとこどつこのみなさん。二年間のご無沙汰でした。お元気でいらつしやいましたか。結構結構。あほでもかすでも元気が一番。まことおめでたいことに存じます。さて、思い起こせば三重県の震災がれき受け入れ問題に端を発し、二〇一三年秋十月に発行された地域雑誌「伊賀百筆」第二十三号の誌面において、

「こんにちはッ。県民に腐れきんたまを押しつける男ッ。三重県知事の鈴木えーけーでございますッ。えーけーえーけー僕えーけー。けつのまわりはくそだらけー。わはわはわはわはー。わはわはわはわはー。早く国会議員になりたあいッ」とか、

「こんにちはッ。手前ども伊賀南部環境衛生組合ののーたりん一同は三重県知事さんの腐れきんたまを地域住民のみなさんおひとりおひとりのお顔にねたねたねたにちゃんにちゃんにちゃんにじくさしていただかさしてくれやさしてもらわさしてよいやさのよいやさッ。よいやさのよいやさッ」

とか、そげなこつ書いたのか書かんだのか、いまとなつては自分でもよう思い出せませんばつてんが、罰当たりな漫才でみなさんの大喝采ば頂戴した手前が戻ってまいりましたばい。みなさんの熱烈なるご要望に雄々しくお応えして、めでたくカムバックを果たしましたですけんね。しかも「伊賀百筆」本誌ではなく、付録雑誌「伊賀別筆」を仕立てての華麗なるカムバックですのえ。十八万伊賀地域住民のみなさんや。きつうきつう堪忍どつせ。

(雄鶏屋ほんだら)

伊賀別筆 第一号 目次

戻ってまいりました……………表紙の裏

僕の図書館戦争完結篇

名張市にあすはない……………1

先生がたはどこへ行く……………5

委員長にお聞きしました……………9

最初になにが決まったか……………13

政務活動費はどうじゃないな……………18

はじまりは無茶苦茶だった……………22

正直にいえばいいのに……………26

ラッキーなこともある……………30

ワレ地上戦二突入……………34

名張はどーしてくれてますのどなー

①中町……………4

②平尾……………8

③豊後町……………12

④細川邸……………16

⑤新町……………17

⑥上本町……………21

⑦本町……………25

⑧元町……………29

⑨リバーナ……………33

⑩榊町……………36

しやらしませんね……………裏表紙の裏

僕の図書館戦争完結篇

雄鶏屋ほんだわら

名張市にあすはない

「こんにちはッ」

「そのパターンまだやりますのか」

「お経は読んでも乱歩は読まぬッ」

「なんですもんそれ」

「腹が張っても屁はこかぬッ」

「知りませんかな」

「三重県名張市立図書館初代館長の高野香洋でございますッ」

「いったいどなたですねん」

「こんにちはッ」

「だいたいこんなとこに実名出すのはまずいのとちがいますか」

「教育やぐざ三重県教職員組合名賀支部のほうから来た者ではない男ッ」

「またややこしい話ですな」

「元名張市教育長の梅田馨でございますッ」

「実名はあかんゆうてますかな」

「こんにちはッ」

「まだつづくんですか」

「多少のお時間をいただければ西暦を和暦に脳内変換できる男ッ」

「意味わかりませんけど」

「ただし昭和にかぎるッ」

「勝手に限定されましても」

「前名張市教育長の手島新蔵でございますッ」

「ええかげんにしときませんか」

「なにかご不満でもおありですか」

「実名を出して人の悪口ゆうのはいかななものかと」

「君の耳は節穴なんですか」

「節穴はふつう目エですけど」

「僕はこれまで名張市立図書館のためにご尽力いただいた公務員OBのかたがたに感謝を捧げるべくですな」

「そもそもそうですからな」

「そもそもとおっしゃいますと」

「公務員OBのかたがたを話題にするとか君の話はそもそも古いんです」

「それはたしかにそうですね」

「もつと前向きに名張市の将来を見据えた話ができますんか」

「こんにちはッ」

「未来を展望してください未来を」

「二〇一八年の春には名張市長になる男ッ。三重県議会議員の中森博文でございますッ」

「誰が市長選挙を展望してくれと頼みました」

「比例代表は自由民主党とお書きください」

「市長選挙に比例代表は関係ありませんかな」

「日本共産党でも全然大丈夫です」
「いったいなにが大丈夫なんですか」

「けど君もたいがい無理なことゆうてくれますね」

「なにが無理でした」

「名張市で明るい将来を展望するゆうのはいまや不可能な話なんです」

「なんでですねん」

「市の財政が火の車でお先真つ暗ですから」

「それはたしかにそうですねん」

「だいたい日本という国そのものがお先真つ暗ですしね」

「いまだかつてどこの国も経験したこのない急激な少子高齢化に直面しているそうですねん」

「そのうえ人口減少です」

「日本社会は重大で深刻な問題をふたつも抱えてるわけですねん」

「諸外国からは奇跡のツートップと賞賛を集めてまして」

「あほなことゆうたらあきません」

「しかもわが名張市におきましては」

「なんですねん」

「少子高齢化と人口減少が日本の平均を上回る勢いで絶賛進行中です」

「そんなもん絶賛してごないしますねん」

「三重県内他地域からは奇跡のひとり勝ちと賞賛を集めてまして」

「それいつたいなにに勝つてるゆう話なんですか」

「ですからいろいろご心配もいたいたしております」

「そうですねん」

「たとえば代議士の川崎二郎先生」

「二郎さんにもご心配をおかけしてましか」

「お人柄でしょうね」

「と申しますと」

「川崎先生はいまや十一期目」

「押しも押されもせぬベテラン代議士でいらつしやいます」

「それでも地元住民は親しみをこめて二郎さん二郎さんと呼びてます」

「なるほどそれがお人柄ですか」

「去年三月のことですけど」

「なにがありました」

「おかげさまで名張市が市制施行六十年を迎えました」

「山あり谷ありで六十年」

「アドバンスコープADSホールで記念式典が催されましたね」

「市民が喜びをわかちあいました」

「お忙しいなか川崎二郎先生もお祝いに駆けつけてくださいました」

「地元選出国会議員の先生ですから」

「ありがたいご祝辞も頂戴いたしました」

「二郎さんなんとおつしやつてましたか」

「飛びます飛びます」

「それは坂上二郎さんやないですか」

「川崎先生はおつしやいました。伊賀市も津市も合併しましたけどあなたがた名張市はしませんでしたねと」

「たしかに名張市は市町村合併に加わりませんでした」

「ですから名張市はこの先いづれ立ち行かなくなりますよと」

「そんなこといわれましたも」

「あなたがたは道を誤ったんですからこの次は正しい判断をしなさいねと」

「もひとつ意味がわかりませんけど」

「要するに川崎先生はかなりお腹立ち
みたいでして」

「名張市が伊賀市の合併に加わらな
ったからですか」

「ゆうても国の方針でしたから」

「せっかく国がお膳立てをしてやっ
たのに名張市はなんなんだと」

「合併のご褒美である合併特例債も
いただけませんでしたし」

「財政はいよいよ厳しくなりました」

「ですからこれはほんとに川崎先生
のご人徳なんですけど」

「なんでご人徳の話になりますねん」

「僕みたいな一般市民がそんな挨拶
したらどないなと思います」

「市制六十周年の記念式典ですか」

「市民がたくさん集まって喜んで
こへ乗り込んで名張市はもう立ち行
かへんのじゃ名張市民がうっすいさ
かいじゃこらおんどれやあほんだ
ら」

「そんながらの悪い挨拶してどない
しますねん」

「住民投票とかしゃらくさい真似か
ましやがっておんどれやあほんだ
ら」

「名張市は住民投票で合併にイエス
ノーか民意を問いました」

「そんなことしたら合併反対ゆう
答え出るのは最初から目にみえた
あるやないかおんどれやあほん
だら」

「実際のときには投票した市民の
約七割が合併に反対であるという
結果が

出まして」

「名張は合併しまへんにやとか勝
手なこと抜かしたあぶくがこのさ
まじやど

うじゃこらざまーみさらせ国の
方針に逆ろうたらどないなことに
なるかよう

わかつたかおんどれやあほん
だら」

「ようそこまでいえるもんです
な」

「こんなことゆうてたらとても
ただで

は帰れません」

「そらそうです」

「会場からつまみ出されたり叩
き出されたり丸裸にして放り出
されておしっこひっかけられたり
あぶくはイスラム国に引き渡され
たり」

「君が挨拶を頼まれる心配は百パー
ないと思いますけど」

「ところがさすがにご人徳で」

「なんですんねん」

「場所柄もわきまえない非常識な
ご祝辞を拝聴してもおんどれやあ
ほんだら

ゆうて怒り出す名張市民はただ
のひとりもいませんでした」

「君がひとりでおんどれやおん
どれやゆうてるだけの話ですがな」

「いかに代議士先生とはいえな
にさまのつもりやねんと思いま
せんか」

「そしたら君はなにさまなんです
か」

「僕は雄鶏屋ほんだわら」

「そんな名前を世間が許します
か」

「愛犬の名は小春といいます」

「犬はよろしねん」

「でも名張市はお先真つ暗やと
川崎先生の太鼓判を頂戴したわけ
ですから」

「えらいことですがな」



中町（なかもち）江戸時代には下横町と呼ばれた。高台に建つ藤堂家陣屋の大手門から、南西に

まっすぐ伸びるのが本町筋、それに直交するのが横町の通りで、その交差点から陣屋を仰ぐと左、つまり下手だからということか、下横町と名づけられた。町内では名張の氏神、宇流富志禰神社の一の鳥居が目を引く。町の入口に建てられていたのが江戸中期の大火で焼失、ほぼ七十年後に町民の勧進により石の大鳥居として再建された。近世から近代にかけて中心商業地として栄え、大正一〇年には名張町で最初に道路舗装を行った。昭和一六年、下という語感を嫌ってか、中町に改称。人口は昭和五五年に一八四人、今年三月には八〇人。かつてこの町にあったのは、農協、銀行、映画館、パチンコ屋、酒屋、金物屋、くだもの屋、それからスナック、飲み屋のたぐい。写真は今年の二月一八日に撮影。洋食モリワキで昼食を終えて外に出ると、降っているのかどうかわからないくらいの雨、そのせいか町は死んだように静まり返り、道行く人の影もない。自転車一台、よろよろと通りかかる。「往くものは荷物を積み車に馬を曳きたり／あわただしき自転車かな」という詩句をなぜかしら思い出し、荒寥たる情緒のごときものがいきなり胸に迫ってくるようであった。

先生がたはどこへ行く

「衰退一直線のここ名張市からひきつづき漫才をお届けいたします」

「なんや柔道一直線みたいな感じですけど」

「財政難もここまで来るとよその自治体にはみられない動きが出てきます」

「いいいますと」

「少し前に名張市議会のある先生が行政視察をあえて欠席なさいました」

「新聞でも報じられてた件ですね」

「昨年八月の市議会議員選挙で初当選を果たした柏元三先生が一月に実施された教育民生委員会の行政視察を欠席したというので市議会から嚴重注意処分をお受けになったんですけど」

「たしか財政難が理由でした」

「伊賀タウン情報YOUの二月二十五日付ウェブニュースによりますと『目的の形骸化や市の財政難などを理由に欠席届を提出。議会運営委員会の決定で『正当な理由でない』として差し戻されていたが、視察を欠席した』ゆうよなことでした」

「一理ある話やと思いますけどね」

「一理二理どころの話やありません」

「いいいますと」

「九里四里うまい十三里半」

「なにわけのわからんことゆうてますねん」

「市議会の先生がたによる行政視察は慰安旅行か物見遊山みたいなもんやうのはいまや市民の共通認識です」

「決めつけたらあきませんけど」

「二月二十一日付伊和新聞には柏元三先生の投稿が掲載されてましてね」

「そうなんですか」

「これがまたインパクトのあるタイトルでした」

「どんなタイトルでした」

「『財政非常事態が続く名張市の議員に二泊三日の行政視察が許されるか』

おんどれやあほんだら」

「おんどれやあほんだらは必要ないと思いますけど」

「柏先生はその投稿で『議員の既得権益として宿泊が伴う遠隔地視察が習慣化している』とご指摘でした」

「なんで遠隔地なんですか」

「『行政視察が近場で行われず、常に宿泊が必然の遠隔地が視察地に選ばれる理由は、巷間『夜の部』があるからと言われています』みたいなことで」

「そんな危ない発言したら先輩議員から怒られませんか」

「柏先生によれば『予期した以上の波紋が生じました。古参議員たちは『行政視察は役に立つ』と反発します。市民に対して説明責任も果たせない視察にどれほどの価値があると言うのでしようか』おんどれやあほんだら」

「いちいちおんどれやあほんだらつけなしやべれませんか」

「市民レベルでは議員先生の視察はレジャーであるゆうのが共通認識なんですけどどうとう市議会の内部からこんな声が出てくるようになりました」

「財政難なればこそその声ですか」

「ぎゅッ。ぎゅッ。ぎゅッ」

「急にどうしました」

「やーぎゅーのぎゅーッ」
「なんですんねんいったい」

「正味どうなんやろなと思いつて」

「議員さんの行政視察ですか」

「先生がたはうわさの夜の部でいったいどこまでお乱れになるのかと」

「そんな部があるかどうかともわかりませんかな」

「そこでお聞きしてみました」

「どなたにお聞きしました」

「もちろん市議会の事務局です」

「そんなことできるんですか」

「メール出したら一発です」

「どんなメールでした」

「名張市議会事務局御中」

お仕事ご苦労さまです。雄鶏屋ほんだわらと申します。怪しい者ではございません。今秋発行予定の地域雑誌『伊賀百筆』第二十五号（伊賀百筆編集委員会発行）の付録雑誌『伊賀別筆』第一号（名張人外境発行）に掲載すべく漫才『僕の図書館戦争完結篇』を執筆しております。まだ五ページまでしかできあがっておりませんが、PDFファイルでご覧いただきたいと思います。

<http://www.e-net.or.jp/user/stako/20150401.pdf>

つきましては、本年1月に実施された教育民生委員会による行政視察の日程、視察先、宿泊施設名、参加議員個々による市民への視察結果報告の有無をお知らせいただきたく、また、参加された議員のみなさんと職員のみなさんのお名前もあわせてお教えいただきたく、公務ご繁多のおりからまことに恐縮ではございますが、よろしくお取り計らいいただきますようお願い申しあげます。『伊賀別筆』第一号巻末の協力者一覧には、貴事務局のお名前を記載させていただきます。

なお、『僕の図書館戦争』シリーズは昨年12月発行の個人雑誌『伊賀一筆』第一号の誌面で大々的に全国発信しております。伊賀地域の書店には並んでおりませんが、オンライン書店アマゾンで買い求めいただけますので、ご読書のうえお仕事にお役立ていただければ幸甚これに過ぎるものはいません。

<http://www.amazon.co.jp/> 伊賀一筆
-中%EF380%80 相作 /dp/B00PVVIT
SU/ref=sr_1?is=books&ie=UTF8&qid=1420175596&sr=1-1&keywords=伊賀一筆

もちろん、名張市立図書館でもお読みいただけます。

それでは、なにとぞよろしくお願ひ申しあげます。

2015/04/03

「君ほかにすることないんですか」

「無趣味な人間でございます」

「それで事務局の回答は」

「梨のつぶてでございます」

「むこうも忙しいことでしょうしね」

「三月議会は終わりましたけど」

「雄鶏屋ほんだわらがどうたらこうたらそんなわけのわからんメールまでもに相手してもらええると思いますか」

「ぎゅッ。ぎゅッ。ぎゅッ」

「またそれですか」

「やーぎゅうーのぎゅうッ」

「さつきからなにぎゅうぎゅうぎゅうぎゅううてますねん」

「いつぼう三重県議会のほうはちようど改選を迎えました」

「四月三日が告示日でした」

「名張市選挙区は例によってはやばやと当選が決定いたしました」

「またしても無投票です」

「現職の先生が三回つづけて無投票当選を果たされました」

「民主党の北川裕之先生と自由民主党の中森博文先生が仲よく一議席ずつ」

「仲よきことは美しきかな」

「そういう問題ではないと思いますけど」

「今回は県内十七選挙区のうちなんと八選挙区が無投票という結果になっております」

「無投票のところが増えてきてるみたいですね」

「選挙離れとか政治離れとか呼ばれますけど」

「とくに若い世代の選挙離れや政治離れはちよつと心配です」

「あとまた心配なのが年取った世代の人間離れ」

「そんなん聞いたことないですけど」

「イオン名張店とか行ったらもはや人間ではないなにかみたいなさんがうろろろしてますから」

「絶対してないと思います」

「しかし政治への無関心はけつして望ましいことではありません」

「それはそうです」

「こちらで政治への関心を取り戻す必要があるんです」

「そのためにわれわれはなにをすればいいのか」

「やはり名張市議会の先生がたが市民の税金で遠隔地まで足をお運びになつた行政視察という名の観光行楽の夜の部でどこまで破廉恥に乱れ狂っていらつしやるのかという実態をわれわれの漫才で赤裸々に報告して政治への信頼を取り戻さなあかんでしょうね」

「それが事実やつたら信頼はどん底まで失墜してしまうと思います」

「現時点ですでにほぼどん底という気がしないでもないですけど」

「それでは困りますかな」

「ですから正味のところを確認したいと思ひまして」

「質問のメールをお送りしたと」

「ところがいまだにご返事をいただけないような次第でございます」

「せやからそれは君がまともに相手にされてないゆうことですから」

「市民を愚弄する気かッ」

「市役所の人をええだけ愚弄してるのは君のほうやがな」

「もしかしたら古参議員から圧力かかつてるのかもしれませんし」

「君は誰からも問題にされてないと思ひますけど」

「有権者を愚弄する気かッ」

「ですからそれは君のほうやと」

「でもこのままやと漫才がつづけられなくて僕とても困るんですけど」

「好きなだけぎゅうぎゅうゆううつたらよろしがな」

「ぎゅッ。ぎゅッ。ぎゅッ。ぎゅッ。ぎゅッ。ぎゅッ」

「もういいですから」



平尾【ひらお】 近鉄大阪線の名張駅がある。昭和

和五年に近鉄の前身、参宮急行電鉄が開通して開設された駅である。大正十一年、関西本線伊賀上野駅から上野町を経て名張町に至る伊賀鉄道が全通し、終点として設けられた名張駅はこの駅が新設されると西名張駅に改称、昭和三十九年に廃止された。農村だったが、駅の誕生によって名張町の表玄関となり、商店街化が進行、平尾山と呼ばれる丘の周辺は歓楽街と化して、昭和八年前後の全盛期には十軒近いカフェが二百人の女給を擁していたという。名張駅の年間乗降客は、平成七年の三九六万一一〇九人をピークに減少。うどんで知られた食堂、一月屋の廃業はもう十年ほども前になるか。駅前に並んでいた飲食店や喫茶店はほぼ姿を消し、魚民、つば八、白木屋といったチェーン店ばかりが目につくが、参宮急行電鉄開通の年に創業した賛急屋はいまも名物のなばり饅頭を製造販売し、酒食も提供する。平成四年に新設された東口の駅前には同二五年、名張ロータリークラブが江戸川乱歩の銅像を設置した。人口は昭和五五年に一六九三人、今年三月には七九三人。西口の駅前には桜が植えられ、季節には花のトンネルができる。写真は四月五日に撮影。西口へつづく桜並木は陽を浴びてはらはらと散りそめていた。

委員長にお聞きしました

「これは相当えらいことですけど」

「なんですんないそうに」

「君のご忠告どおりぎゅうぎゅうぎゅうぎゅうぎゅうてましたら」

「ほんまにゆうてたんですか」

「名張市議会事務局の総務調査室からメールでご返事をいただきました」

「あんなあほなメールにですか」

「ありがたいことでございます」

「それでご返事の内容は」

「さっそくご紹介申しあげますと『ご照会頂きました「平成26年度教育民生委員会行政視察」に関してご回答いたします』ゆうようなことでした」

「まともに相手していただいています」

『(日程) 平成27年1月28日(水)』

30日(金)』

「たしかに二泊三日ですね」

「うわさは真実だったんです」

「うわさなものにも二泊三日ゆうのは最初からわかってたことですがな」

『(視察先) ①岡山県倉敷市、②岡山

県岡山市、③福岡県北九州市』

「中国地方から九州方面ですか」

「なんと申ししましても冬場は暖かい土地が人気みたいで」

「人気は関係ないと思いますけど」

『(視察内容) ①介護支援いきいきポイント制度、②ごみの減量化の取組み、③いのちをつなぐネットワークの取組み』

「そういった制度や事業の先進地を視察していらつしやったと」

「このあたりはまったく問題ないですね」

「てゆうかここが最重要ポイントやと思っただけです」

「非の打ちどころがないほどきれいなもんです」

「なにかきれいですねん」

「消化試合は一日一ゲームという鉄則がきれいに守られています」

「消化試合やないですがな」

「アリバイ工作に無駄な努力はいっさいつかいませんよ」

「そんなことゆうてたら君ほんまにあきませんよ」

「かわいいたいえばかわいいたい感じもしますけどね」

「どのへんがですか」

「介護とかかみとかなんたらネットワークとかちゃんと名目を用意して工作してるとこがじつにかわいい」

「名目とか用意とか工作とか君」「名張市議会の好感度大幅アップ」

「視察の話を進めませんか」

『(宿泊施設名) ダイワロイネットホテル岡山駅前、リーガロイヤルホテル小倉』

「岡山と小倉にご宿泊であつたと」「しかしおかしいですね」

「なにかおかしい」「議会事務局の総務調査室から頂戴したこの回答」

「どないしました」

「名張市民大注目夜の部のことがまったく書かれておりません」

「そんな部がほんまにあるのかどうかわからんゆうてますがな」

「やはり人知れず隠蔽工作が」「そんなもんありますかいな」

『(視察結果報告) 委員会提出の研修視察報告書』

「そうゆうのを提出する決まりになつてるわけですね」

『(参加議員氏名) 幸松孝太郎、富田真由美、三原淳子、森脇和徳、浦崎陽介、足立淑絵』

「つまり柏元三先生以外は全員ご参加ゆうことで」

『(随員職員氏名) 恵村和生』

「随行も必要です」

「それでまあ『なお、視察結果報告』については、参加議員個々が作成したものではなく、委員会提出のものとなります。写しをご入用の場合はお手数ですが、別途情報公開請求をお願いいたします』ゆうよなことでご返事はおしまいとなっております」

「情報公開請求はしたんですか」

「いや研修視察報告書ゆうたかてしよせん随員職員のかたが作文なさったアライバイワークアイテムでしょうから」

「君さっきから根拠もなしに工作工作と決めつけてますけど」

「それにまだよくわからないこともありますので」

「どないしますねん」

「教育民生委員会委員長の幸松孝太郎先生にメールでお尋ねすることにいたしました」

「君ほんまにほかにすることないんですか」

「名張市の公式サイトで幸松先生のメールアドレスを確認いたしました」

「いったいなにお尋ねしましてん」

「行政視察に関して七点ほど」

「雄鶏屋ほんだわらがですか」

「犬は小春と申します」

「幸松先生もええ迷惑ですがな」

「それはそうかもしれません」

「どうせ相手にはしていただけないと思いますけど」

「ご返事をお待ち申しあげているところでございます」

「またぎゅうぎゅういいながら返事待ちですか」

「それでは芸がありません」

「もともとなかったと思いますけど」

「ですからお待ちしてるあいだに過去を振り返ってみようかと考えまして」

「過去でなんですんねん」

「ゆうても僕ら名張市議会には厳しい目を向けつづけてきましたからね」

「それ初耳みたいな気がしますけど」

「たとえば二〇〇二年九月発行の地域雑誌『四季どんぶらこ』第二十四号では行政視察に鋭く切り込みました」

「十三年も前の話ですか」

「その漫才をいまから再現VTRで紹介申しあげたいと思います」

「なにやらされるかわかりませんな」

「じつはうちの親父が名張市議会議員をやつてたことがあります」

「それは知りませんでした」

「わずか一期だけでしたけど」

「それでもえらいもんですがな」

「せやから名張市議会議員なんかえらいことないゆう話なんですけど」

「どうゆうことすんねん」

「親父が市議会議員の視察旅行から帰つてきてえらいびつくりしてました」

「なんぞあつたんですか」

「議員の視察旅行ゆうのはみなさんもご存じのとおり視察は名目で実態は慰安旅行ゆうか物見遊山ゆうか」

「そんなことないがな。いろんなことで見聞を広めたり専門知識や最新情報をも身につけたりするための旅行ですがな」

「まあ建前はそうですけど」

「建前やないゆうねん」

「ですから僕も現状はよう知らないのですけどうちの親父が名張の市議会議員やってたころはそうやったんです」

「慰安旅行か物見遊山でしたか」

「それで帰ってきた親父が感に堪えないゆう感じでゆうてたんですけど」

「どんなもん視察してきたんですか」

「旅館に一泊して次の朝その旅館をあとにするときのことです」

「どないしました」

「親父と同室やった議員のひとりが着てた浴衣くるくる丸めて自分のポストンバッグにつっこんでしもたゆうんです」

「完全な浴衣泥棒やないですか」

「旅の恥はかき捨てゆうぐらいですからこんなようある話なんですけど」

「けどいくらなんでも議員さんがそんなことしたらあきませんな」

「その旅館の人たちはちよつと啞然としたでしょうね」

「名張市議会の名前で泊まってる人間がそんなことしたら名張の恥をよその土地に広めて回ってるようなもんですな」

「以上再現VTRでお送りしました」

「わざわざ再現する必要はなかったような感じですけど」

「あのときの漫才ではほかの先生がたにも話題になっていただきました」

「よう叱られませんでしたね」

「たとえば選挙になると単車で地元牛肉を配って回ってた先生の話題」

「伊賀牛で買収ですか」

「ホンダスーパーカブの荷台にくくりつけたかごを肉の包みで満杯にして飛び回ってた某先生がある家を訪れて思いがけない不幸に見舞われました」

「どんな不幸でした」

「よろしゅう頼むでゆうて外に出たらどこぞの犬が後ろ脚で爪先立ちして車のかごに頭つつこんでたんです」

「えらいことですがな」

「こらあッ。先生が大声で怒鳴りつけるとその犬は立ったまま恐ろしい顔で先生のほうを振り向きます」

「犬も本気ですわね」

「その口には肉の包みがしつかりと」

「買収一軒分ですか」

「先生は走って追いかけてましたけど犬の逃げ足の早いこと早いこと」

「えらい災難でした」

「でも不幸中の幸いゆうやつですか」

「なんですんねん」

「先生はその選挙でみごと上位当選」

「それはなによりでした」

「犬まで買収したんやさけ票も多いわさと近郷近在で大評判」

「犬は投票しませんがな」

「国津の山里に伝わるほほえましい昔話でございます」

「地区名は出さんでええねん」

(二〇一五・四・一一)



豊後町〔ぶんごまち〕 この町で生まれた。家は借家で、大家は町内の炭屋だった。保育所は旧上野市で通ったが、小学校から高校まではまたこで過ごした。町の誕生は大正十三年。二年前に伊賀鉄道の名張駅が開設されて周辺の市街地化が進み、駅のある一帯は木屋町、その南が豊後町になった。藤堂高虎以前の伊賀国主、筒井定次は家臣の松倉豊後守勝重を名張に配し、勝重はのちに藤堂家陣屋が建つ高台に居館を、子の重政は南方の山に城砦を築いた。豊後守の城につづく通路、との意で町名がつけられた。一貫して住宅地で、商店は少なかった。表通りから入った場所には在日朝鮮人の小規模なコロニーがあり、朝鮮部落と呼ばれていた。同世代に小池、高波、野口といった通名の男の子がいて、むろん学校も一緒だった。彼らの母親が廃品回収のリヤカーを引く姿をおぼえているが、母親たちが本気で怒り出すとたちまち言葉の意味がわからなくなった。人口は昭和五五年に三三五人、今年三月には一八九人。写真は四月一日に撮影した。朝鮮部落の跡地である。全体が屋根に覆われて昼でも暗かった一画は公園に姿を変えていたが、一面に雑草が繁茂し、遊具はもう長く使用されていまいようだった。この町に住みつづけていた叔父は一昨年秋、他界した。

最初になにが決まったか

「これは相当えらいことですけど」

「またそれですか」

「名張市議会事務局の議事法務室からメールを頂戴いたしました」

「もしかしたら幸松先生関係で」

「ちゃんとお答えをたまりました」

「たまりましたはいいいんですけれどなにお聞きしたのか先にそれを教えていただきませんと」

「『本年1月に実施された教育民生委員会の行政視察にかんしまして、委員長でいらっしゃる幸松先生に次の点をお尋ねいたしたく、不躰ながらメールをお送り申しあげる次第です』ゆうよなこととございまして」

「それが幸松先生にお送りしたメールですか」

「ごく簡単なことだけお聞きいたしました」

「どんなことでした」

「一点目は『視察先、視察テーマなどの検討は、いつ、どこで、どなたによって始められたのでしょうか』と」

「たしかにごく簡単な質問です」

「つづく二点目は『検討にあたって、視察先、視察テーマなどのうち、最初に決定されたのは、どういう要件だったのでしょうか』と」

「そんなことお聞きしてごないしますね」

「最初に決まったのは今回の二泊三日の視察旅行でどの方面に行きましょかゆうよなことやと思うんですけれど」

「決めつけたらあきませんがな」

「ですからお聞きしたわけです」

「ほかにはどんな質問を」

「三か所の視察先について」

「倉敷市と岡山市と北九州市でした」

「その三か所を視察しようと提案したのはそれぞれどなたでしたかと」

「誰かが提案したことは間違いないですからね」

「それからその三か所以外の視察候補地はどこでございましたかと」

「そんなんあつたんですか」

「あつたかどうかわかりませんからお聞きしてるわけとございまして」

「一般的にはいくつもの候補をリストアップしてから絞り込んでいくことになると思いますけど」

「次が七問目」

「最後の質問ですね」

「得点はどーんと百倍ッ」

「クイズ番組やないんですから」

「『視察の決定は、いつ、どこで、どなたによっておこなわれたのでしょうか』ゆうよなこととございました」

「これも簡単な質問です」

「お答えをいただけるものかどうかと案じておりましたところ」

「雄鶏屋ほんだわらとかあほなことゆうてたら普通の人は相手にしてくれませんかからね」

「犬は小春と申します」

「それはもういいですから」

「しかも僕には人間性にかなり問題があるという定評がありまして」

「ますますあきませんがな」

「犬には問題ないんですけれど」

「漫才終わるまでその犬どこぞへ預けとけませんのか」

「平成27年4月9日付で照会のありました件について、次のとおり回答します。」

(1) (2) (6) 平成26年10月6日の教育民生委員会において、平成26年度の行政視察の日程を議会公務等とも調整の上、平成27年1月中旬から下旬に実施することとし、視察内容の候補として、山口県光市のコミュニティスクール、北九州市の民生委員の支援の仕組み、また、ごみゼロ、生ごみ減量の関係で熊本市や佐賀市、あるいは食育の取組等、先進事例の視察を挙げ、今後、調整していきたい旨、副委員長より提案がありました。このことについて、委員より、光市のコミュニティスクールは、津、鈴鹿市等、近くにも事例がありやめた方が良く、北九州市の民生委員業務の支援員による補助の取組はよい、との意見もあり、11月開催の委員会に北九州市の民生委員の補助の取組のほか、調査事項、調査先の案を委員長、副委員長で選定し、提案することとなりました。

(3) (4) (5) 先の委員会で示し特に異議のなかった北九州市の「いのちをつなぐネットワークの取組」を中心に、先の委員会でも示したテーマのうち、移動可能性も踏まえ先進事例から視察先を検討する中で、委員長、副委員長協議の上、倉敷市「介護支援いきいきポイント制度」、岡山市「ごみの減量化の取組」を視察先候補として選定し、視察先行政の受入れも可能であることを確認したことから、平成26年11月11日の教育民生委員会において、視察先及び概要、並びに行程案について、委員に提案しました。

(7) 平成26年12月16日開催の教育民生委員会で、決定しました。
名張市議会 教育民生委員長 幸松孝太郎

「それが幸松先生のお答えですか」
「ご回答全文を謹んでご紹介申しあげました」

「去年の10月6日に検討が始まって12月16日に決定がくだされた」と
「そうゆうことらしいですね」

「それがわかったからゆうてなにがどうなりますねん」

「次の質問に入ることができます」

「まだ質問があるんですか」

「幸松先生にはとりいそぎお礼のメールをお出ししておきました」

「それは大切なことです」

「幸松孝太郎様」

お世話さまです。雄鶏屋ほんだわらでございます。昨日、名張市議会の議事法務室からのメールで、4月9日付メールでお送りした質問へのご回答を拝受いたしました。ご多用のところ、不躰なお願いをお聞き届けいただき、心から感謝申しあげます。

なにしろ不慣れなこととて、不行き届きなどところが多々あったことをお詫び申しあげますが、二点目の「検討にあたって、視察先、視察テーマなどのうち、最初に決定されたのは、どういう要件だったのでしょうか」という質問は、主旨があいまいで、ややお答えいただくににくい内容であつたかと反省しております。

ただ、頂戴したお答えを拝見するかぎり、視察の候補地が光市、北九州市、熊本市、佐賀市と中国から九州に集中しておりますので、九州方面へ、といったおおまかな視察先が最初に決定されたものと判断されます。また、やはりご文面から、具体的な視察候補地は議会事務局によって選出されたものかとも推測される次第です。

以上二点につきましては、教育民生委員会の場でご提案になった副委員長富田真由美先生に近く直接メールをさしあげ、と思ったのですが、名張市公式サイトでは富田先生のメールアドレスが公開されておられませんので、議会事務局経由でメールをさしあげ、お尋ね申しあげることになしたいと思えます。

このたびはご丁寧なご回答をたまわり、重ねてお礼を申しあげます。これをご縁に、今後ともなにとぞよろしくお願い申しあげます。

2015/04/17』

「そしたら次の質問ゆうのは」

「教育民生委員会の副委員長さんをお願いしようかと考えております」

「君ほんまに面倒な人間ですね」

「そうするとまたしても待ち時間が生じてしまいますので」

「もしかしたらまた昔の漫才ですか」

「十三年前の『四季どんぶらこ』の漫才では市議会の先生がたの議員活動にも鋭くメスを入れてましてね」

「先生がたの活動にもいろいろ苦勞が多いと思いますけど」

「苦勞のひとつは日常の活動が市民の目にみえてこないという点です」

「たしかにそうですね」

「議員活動が新聞の地方版で報道されるのは一般質問くらいですから」

「先生がたの晴れ舞台です」

「しかし氣いつけなあきませんね」

「なにに氣いつけますねん」

「ちよっと前に市議会で某先生の一般質問を拝聴したんですけど」

「その先生なんてゆうてはりました」

「めされていた」

「なんですんねんそれ」

「なんのこっちゃ思て前後の文脈から考えたらもうされていたなんです」

「ちゃんと説明してもらえませんか」

「目エですがな目エ。目されていたゆうのをもうくされていたとよう読まんとめされていたと読んでたんです」

「つまり誰かに書かせた原稿をお読みになっていたゆうことですか」

「上は国会から下は市町村議会まで議員先生が質問原稿を他人に書かせるゆうのは普通にある話ですから」

「けどそれまづいのとちがいますか」

「まずいことは全然ないんですけど問題なのはちゃんと振りがな振つといたらんかゆうこととして」

「そこですか」

「なにしろ相手あほなんですから」

「あほゆうことありませんがな」

「ちなみに十三年前の漫才ではその先生いずれは天に召されますやろと予想したんですけどまだ召されていらつしやらないことをお伝えしておきます」

「そんな報告いりませんから」

(二〇一五・四・一八)



細川邸（ほそかわてい）江戸期に伊賀、伊勢両国を治めた津藩は藤堂高虎を藩祖とする。高虎は近江に生まれ、浅井長政らに仕えたあと羽柴秀長の家臣となった。秀長は秀吉の実弟で、秀吉は丹羽長秀を懐柔するためその三男、仙丸を秀長の養子に迎えさせたが、ついで自身の甥、秀保を秀長の養子とした。厄介者となった仙丸を養子としたのが、子宝に恵まれていなかった高虎である。仙丸は長じて高吉となったが、高虎に実子の高次が生まれたため、高虎没後には高次が藩主となり、高吉は伊賀国名張に二万石の領地を与えられて弟の家臣格に甘んじた。高吉は寛永一三年（一六三六）、伊予国から名張に入り、名張藤堂家の始祖として領地経営に着手する。たびたび氾濫した名張川には堤防を築いて河流を固定したが、このときの工事で新たに造成された地が新町である。細川邸は新町にあった。大和の長谷寺と伊勢の神宮とを結ぶ初瀬街道に面し、江戸期から明治初年にかけて薬種商を営んだ。町家の風情をとどめる民家はやがて無人となり、平成二〇年に名張市の手で観光交流施設やなせ宿に整備された。写真は同一七年に撮影。細川邸の裏、名張川に臨んで設置された看板で、なぜかエジプトが描かれている。初めて眼にしたときの衝撃はいまに忘れたくない。



新町〔しんまち〕 明治二十七年一〇月二一日、江戸川乱歩はこの町の借家に生まれた。大家は横山という医師で、横山医院は表通り、借家は裏通りに面して背中合わせに建っていた。父親は旧津藩士の子で、関西法律学校を卒業、名張町にあった名張郡役所の書記となり、津市で独居していた母を招いた。同じく津から妻を迎え、長男の乱歩を儲けたが、翌年、鈴鹿郡役所に転勤となって亀山町に転居する。昭和二十七年、学生時代に知遇を得て以来、恩人として慕っていた伊賀出身代議士、川崎克の次男、秀二の衆院選応援で名張町を訪れた乱歩は、かつて生家があった柵田医院の中庭に立った。その中庭に、市民の浄財で生誕地碑が建立されたのは同三〇年。乱歩は夫婦で除幕式に臨席した。写真は四月一二日に撮影。生家が面していた裏通りで、右側の新町と左側の本町を区切る境界でもある。柵田医院の中庭は新町側にあったが、昭和三四年の伊勢湾台風で被害を受けたため中庭に住居が増築され、生誕地碑は路地をまたいで本町にあった入院病棟の庭に移転した。のち病棟の土地建物は名張市に寄贈され、平成二十一年、乱歩生誕地碑広場に整備された。左に見える建物のむこうに広場があり、生誕地碑が建つ。人口は昭和五五年に五三九人、今年三月には二三四人。

政務活動費はどうじゃないな

「ピンチをチャンスに変えるという言葉葉がありますね」

「実際にはかなり難しいことやと思いますけど」

「名張市はいまや財政が大ピンチを迎えてまして」

「だからこそ市議会議員の先生がたが二泊三日の行政視察なんかしててええのかという声も出てくるわけです」

「せやから行政視察なんか廃止してもたええと思うんですけど」

「多少でも市の予算が節約できます」

「市民からは圧倒的な共感と支持を集めるはずです」

「全国的な話題にもなるでしょうし」

「衰退一直線の地方自治体の議会がどうあるべきかという先例を名張市が提示することになるわけです」

「衰退の時代の新たなモデルを名張市議会がお示しいたしますと」

「つまり名張市は重大なピンチのなかで次の時代を開くためのチャンスを手にしているんです」

「名張市はそのチャンスをちゃんと生かすことができるんですか」

「絶対無理ですね」

「なんでですねん」

「名張市だもの」

「答えになってませんがな」

「けど名張市ももうちよっと現在のピンチを直視して将来のために手を打たないとだめでしょうね」

「いいいますと」

「たとえばこのあいだ名張市地域活力創生会議ゆうのができましたけど」

「そうなんですか」

「伊賀タウン情報Y.O.Uの四月十五日付ウェブニュースによりますと『地方活性化を目的に、国が昨年に閣議決定した「まち・ひと・しごと創生総合戦略」を受け、市独自の総合戦略策定す

るため、名張市は4月15日、庁外からの意見を取り入れたいと、産学官民の12人で構成する名張市地域活力創生会議を立ち上げた。9月までに4回の会

合を持ち、意見を出し合う』

「その会議に問題があるんですか」

「ゆうても名張市ですよ」

「それがどうしました」

「まちなか再生事業であれだけの大失敗を演じた名張市に地方創生なんかできるわけありませんがな」

「それとこれとは話が別やと思いますけど」

「再生やろが創生やろが名張市がなんの考えもなくただ国の思いつきに振り回されてるだけの話ですから」

「たしかにそんな気もします」

「名張のまちなかのピンチをまちなか再生事業でチャンスに変えるといいながら大ピンチに変えたあげくゲームセットに追い込んでしまったという過去の実績から判断しますと」

「ゲームセットではあきませんがな」

「名張市は地域活力創生がどうたらこうたらいいながら地域の息の根を完全にとめてしまうはずなんです」

「なんでそうなりますねん」

「名張市だもの」

「それでは答えになってないゆうてますがな」

「国がやれまちづくり交付金やほれまちひとしごと創生やと適当なことゆうてるあいだに地方は衰退一直線でもうぼろぼろになってるんです」

「名張市はほんとにそんな感じですよ」

「ですから行政視察を廃止するくらいのことを考えるべきなんですけど市議会の先生がたには無理でしょうね」

「そんなことないでしょうけど」

「手前どもはなにも考えさせていただかないことにさせていただいております」

「それ名張市役所のみなさんのこととちごたんですか」

「名張市議会の先生がたも似たようなものなんです」

「どこが似てますねん」

「どちらも地域社会の寄生虫みたいな存在ですから」

「人を回虫とか蟻虫とか条虫とかみたいにゆうてたらあきませんか」

「ところが難儀なことに宿主である名張市がほぼ死にかけてまして」

「話がだげさ過ぎませんか」

「宿主が死んだら寄生虫も死ぬわけですから先生がたにはそのへんの事情をよくわきまえていただきませんか」

「寄生虫とか宿主とかそういう問題では全然ないですから」

「三月七日付伊和新聞に『記者の目』というコラムが掲載されてまして」

「なにが書いてありました」

『合併がなかった名張市は、財政非常事態宣言をしながら、議員報酬は伊賀市より多く、県下で3番目と報じられた。職員の給料も北勢の自治体並みであり、伊賀市より多い』ゆうよなことでございまして」

「名張市の議員先生も職員のみなさんもそこそこ恵まれてるみたいですね」

「しかも議員先生がたの場合は議員報酬とは別に政務活動費も支給されますから」

「政務活動費は去年の夏に兵庫県議会の先生による号泣会見で一躍話題になりましたけど」

「名張市議会でもいろいろ面白いことがあるみたいです」

「どんなことですか」

「たとえば一昨年七月十二日付伊賀タウン情報YOUの政務活動費に関する記事によりますと『名張市議会では7つある使途項目の資料作成費で、清風クラブ（5人）の70代男性議員が使用不可の慶弔費に該当する香典袋代計652円を請求していた。議会事務局に取材した1週間後、同議員は現金で市に返還。事務局も収支報告書を修正した』ゆうよなこととして」

「お葬式の香典袋代を政務活動費として請求していらつしゃったんですか」

「そろそろおのれが香典もらわんならんような齢になって欲げけ先生なにをなさましい真似さらしとるのかと」

「ちよつと困ったもんですね」

「ですから宿主をこれ以上むさぼるのはやめてくださいという願いも託しつつ教育民生委員会の副委員長さんにメールをお出ししたんですけど」

「いまだにご返事を頂戴できないと」

「お葬式でお忙しいんでしょうか」

「お坊さんやないんですから」

「こんにちはッ。お経は読んでも乱歩は読まぬッ」

「突然なんなんですか」

「お坊さんという言葉について反応してしまってます」

「あほなことゆうてる場合やありませんか」

「けどこうやってあほなことゆうてるあいだに名張市議会事務局の議事法務室からメールを頂戴いたしました」

「もしかしたら富田真由美先生のお答えですか」

「幸松先生といい富田先生といいまことにありがたいことでございます」

「雄鶏屋ほんだわらかふざけた名前でお出したメールでしたのに」

「誠実なご回答をいただきましてね」

「君もつと感謝せなあきませんよ」

「実際には議会事務局職員のかたがゴーストライターをお務めでいらつしやるとはいえ両先生には深甚なる謝意を表する次第です」

「そうゆうことゆうの君ほんまにやめとかなあかんで」

「富田先生には二点にわたってお尋ねしました」

「視察先は九州方面であるということが最初に決まったのか。具体的な視察先は事務局職員が選出提案したのか」「幸松孝太郎先生のお答えからはそんなふうに判断されたんですけど」

「実際にはどうでした」

「一点目のご回答の結論だけを抜粋いたしますと『したがいまして、先に視察地域を決定した後に、視察先の検討を進めたわけではありませんので、ご理解いただけますようお願いします』ゆうよなことでございまして」

「前段の話なしでいきなり結論だけ聞かされました」

「二点目のご回答の結論を抜粋いたしますと『なお、議会事務局は、視察先議会事務局を通じて行政の受入れの可否の確認、視察行程の調整等の事務を行うのみであり、視察候補地を選出、提案するものではありませんので、ご理解いただけますようお願いします』ゆうよなことでございまして」

「話の流れがさっぱりわからないんですけど」

「ご回答全文は僕のブログの四月二十四日付エントリ『寸暇がなくても漫才三昧』(<http://nabaringaikeyo.blog.shinobijp/Entry/3064/>)で読みただけです」

「結局どうなんですか」

「視察先は最初に九州ありきということではなかった。視察の候補地選びに議会事務局はノータッチである」

「先生がたがまじめにいろいろ考えて自主的にお進めになったと」

「けどなんやもやもやしてるんです」

「そんなこと知りませんかな」

「もやもやしてたらあたしは誰かの子になっちゃうよ」

「山本リンダさんやないんですから」
「ですから今回の視察にがいっしょされた三原淳子先生と森脇和徳先生と浦崎陽介先生と足立淑絵先生に順次メールでお聞きしてみようかなと」

「君どこまで行くつもりなんですか」

(二〇一五・四・二五)



上本町（うえほんまち）江戸時代には上横町だった。本町通りとの交差点を境として、南東側が上横町、北西側が下横町。昭和二十九年、上横町が上本町に改称した。通りをさらに南東に進むと平尾の宇流富志禰神社に至る。かつての下横町、現在の中町の入口に建つ一の鳥居から神社手前の二の鳥居まで、中町と上本町の一直線の町筋が参道になっている。この参道は商店が軒を連ねた名張のまちの中心街でもあり、上本町は昭和四二年に商店街振興組合結成、四四年に全店舗改造、四九年にアーケード設置と市内最先端の商店街としてにぎわいを誇った。したがって繁栄と衰退の落差が大きく、閉店廃業した店舗が数を増したいま、市内唯一のアーケードが陰を落として通りは薄暗く陰気である。撤去を求める声もあるものの、町にはそのための予算がないという真偽不明の風聞も伝わる。人口は昭和五年に一六一人、今年三月には七五人。写真は四月一八日に撮影した。宇流富志禰神社が二十一年に一度の式年造営を終え、奉祝祭と上棟祭が営まれた日で、新町の御旅所から神社まで渡御する一行が、袴や式服で正装してアーケードの下の参道を通してゆく。大きな棟札は奉祝祭で神社に納められ、上棟祭では紅白の幕をめぐらせた高い棚から氏子に餅が撒かれた。

はじまりは無茶苦茶だった

「世の中やつぱり勘違いとか思い込みとかゆーことがあるものでして」

「君の場合そうゆうケースがとくに多い感じですけど」

「ちゃららー。ちゃららー」

「夜鳴きそばのチャルメラですか」

「日本映画史に燦然と輝く『仁義なき戦い』のテーマ曲です」

「ほなトランペットですか」

「戦後の大混乱期を鋭く切り裂くようなあの高らかなトランペットによるイントロです」

「チャーシューやメンマはおろか鳴門巻きさえ切れないようななまくらな音に聞こえましたけど」

「みこしが勝手に歩けるゆうんなら歩いてみないや」

「そうゆう名せりふがたくさんありましたねあの映画」

「馬のしょんべん飲まんならほんまのしょんべん飲ましちゃうるか」

「やや品位に欠けるようなせりふもいろいろ出てきましたけど」

「いうなりやあれらおめこの汁でめし食うとるんで」

「君なんちゆうことゆうてますねん」

「僕もまさか『キイハンター』の千葉真一さんがあんなことおっしやるとは夢にも思てませんでしたけど」

「それは役柄の問題ですから」

「『牛のくそでも段々になつとるんで』『ええかげん『仁義なき戦い』から離れたらどないですか』

「つまりこの漫才は『仁義なき戦い』シリーズとおなじく実録路線となつてるわけでした」

「好きにしたらよろしがな」

「ですからご登場いただくみなさんのお名前その他に誤りがあつてはいけません」

「実名をお出しするのはまずいことありませんか」

「そこで名張市立図書館の歴代館長さんと図書館開設以降の教育長さんのお名前を名張市教育委員会の事務局にメールでお聞きたいしました」

「気はたしかですか君」

「そしたらやつぱり聞いてみなわからんもんで」

「なにがわかりました」

「こんにちはッ」

「またそれですか」

「お経は読んでも乱歩は読まぬッ。腹が張つても屁はこかぬッ。三重県名張市立図書館初代館長の高野香洋でございますッ」

「実名はやめときなさいて」

「じつはこの決めぜりふに誤りがあつたことが判明いたしました」

「それではあきませんがな」

「教育委員会事務局から頂戴したメールによりますと初代館長は教育長が兼務しておられたらしいんです」

「教育長兼図書館長ですか」

「図書館が開館した一九六九年当時の教育長は荒木長雄さんなんですけどいったいどの馬の骨でいらつしやったのかさつぱりわからない状態で」

「馬の骨ゆうたらあかんがな」

「馬のしょんべん飲ましちゃうるか」
「それは関係ないがな」

「教育委員会の制度にはややわかりにくいところがありましてね」

「地方の学校教育とか社会教育とかを進めるところがちがうんですか」

「たとえばえらい人がふたりいらつしやるゆうのがどうもややこしい」

「えらい人といいますと」

「教育委員長と教育長」

「たしかにどちらも長のつく役職ですけど」

「日本全国津々浦々の一般的な傾向としましては教育長にはだいたい校長先生のOBのかたが就任されることになつております」

「そしたら教育委員長は」

「いわゆる土地の名士ですね」

「どっちがえらいんですか」

「どっちもたいしたことありません」

「そんな失礼な君」

「教育長は教育委員会の事務方のトップで常勤の役職ですからいろいろな実務を担当していらいっしやいます」

「きょうびのことですからご苦労も多いと思いますけど」

「図書館開設三年目の一九七一年からは北森義隆先生が教育長をお務めになったそうです」

「やつぱり図書館長兼務ゆうことで」

「北森義隆先生はまさしく校長先生のOBでいらつしやいました」

「君は存じあげてたんですか」

「存じあげるもなにも北森先生が現役の先生でいらつしやったころ短い期間でしたけど僕の家とおとなり同士の時期がありましたから」

「そうやつたんですか」

「先生は教育長の職から離れたあとで名張史友会という市民組織をおつくりになりました」

「どんな組織ですねん」

「当時は名張市の人口が急激に増えていた時代でした」

「桔梗が丘をはじめとした大型住宅地の開発が進みましたからね」

「関西圏から転居してきたニューカマーの人たちが急増いたしました」

「いまはもうピークを過ぎて名張市も人口減まっしぐらですけど」

「やがてニューカマーのみなさんのあいだに名張の歴史をよく知りたいという欲求が生じてきました」

「新しく住むことになった名張はどんな土地だろうかと」

「しかも名張は奈良の都に近かったせいで古くから開けてまして」

「豊かな歴史があるわけですね」

「そこで北森先生は名張の歴史を市民が気軽に勉強できる場が必要であるとお考えになりました」

「そのための市民組織が名張史友会です」

「その当時僕はいまはなき三和タイムスというローカルメディアの編集者として名張史友会の会員募集から活動開始まで北森先生にかなり密着して取材をさせていただきました」

「お世話になってたわけですか」

「ですから北森先生は存じあげてるんですけどそれ以外の教育長のかたと比べるとほんまにもうこの馬の骨とも馬のしよんべんとも」

「それはもういいですから」

「北森先生のあとは教育委員会の社会教育課長が図書館長を兼務することになりました」

「兼務ばかりですがな」

「七三年からは山本昭始さん。七五年からは稲荷治さん。七七年からは勝山碩元さん」

「君が存じあげてるかたはいらっしゃるんですか」

「酔っぱらいの勝山碩元さんとは一時期よくそこのスナックでごいっしょしたんですけど」

「酔っぱらいは余計ですがな」

「あの酔っぱらいの勝山さんが図書館長を兼務していらっしゃったということとは僕全然知りませんでした」

「しかし図書館長が兼務兼務でええんですか」

「じつは去年『伊賀一筆』という個人雑誌を出して『僕の図書館戦争』シリーズの手記を発表したんですけど」

「ろくな手記やないでしょうね」

「名張市立図書館に関してどうにも理解できないことがありました」

「どんなことですんねん」

「名張市立図書館は開館当初から地元出身作家である江戸川乱歩の関連資料を収集してたんですけど」

「それがどないしました」

「収集するなら収集するで最初にちゃんと考えるとかなあかんことをなにひとつ考えてなかったんです」

「やっぱり手前どもはなにも考えさせていただかないことにさせていたたいておりますゆうようなことですか」

「ただでさえなにも考えない人たちが教育長や社会教育課長が館長を兼務するようなええかげんな態勢でものごとをスタートさせたら理解不能ことになるのも当然やったかもしれません」

「けどスタートの時点でやつとくべきことをほったらかしにしたら結局えらいことになるのちがいますか」

「開館の時点でそこの高校の図書委員にでも考えられることをまったく考えてなかったばっかりに名張市立図書館の乱歩関連資料の収集は無茶苦茶なことになってしまいました」

「どのへんが無茶苦茶ですんねん」

「そのあたりのことは『伊賀一筆』にくわしく書いてありますからアマゾンでポチしてお買い求めのうえお読みいただきたいんですけどとにかく乱歩関連資料の収集では日本一の図書館である名張市立図書館はじつは乱歩のことも資料収集のこともなにも知りませんのでどうかも堪忍したってくださいと『伊賀一筆』の誌面を通じて僕のほうから全国の乱歩関係者をお願いしなければならぬほど無茶苦茶ですて」

「君またそうやって決めつけてますけど」

「それで一九八〇年になってようやく最初の専任館長として高野香洋さんがご就任なさいました」

「初代から数えたら教育長がおふたかたと社会教育課長がおさんかた」

「つまり初代やのうて六代目やったわけですから世の中ほんまに聞いてみんわからんもんでございますなあ」

「感心してる場合やないがな」



本町【ほんまち】 江戸期から一貫して本町と呼ばれた。名張藤堂家陣屋の大手門からまっすぐ南西に伸びる通りの両側に商店が建ち並び、名のとおりメインストリートだった。明治二六年発行の『三重県下商工人名録』によれば、この町の商家が扱っていたのは、薬、小間物、呉服、秤、綿、木綿、糸、酒、書籍、時計、寒暖計、晷表、紙、砂糖、荒物、醬油、酢、陶器、煙草、米、金物、乾物、青物、魚、肥料、菓子、古道具など。料亭と旅館を兼営する家も一軒。明治三六年に八十三銀行支店、同三九年に名張銀行、大正八年に百五銀行派出所、昭和九年に三重殖産無尽会社支店と金融機関が立地する中心街だったが、同五年に参宮急行電鉄が開通し、平尾に名張駅が開設されると商業の中軸は駅に近い上本町と中町、その先の櫛町に移った。人口は昭和五年に三七八人、今年三月には一七二人。金融機関はとうになく、百五銀行名張支店跡地は駐車場と化した。写真は五月一二日に撮影。自転車が通過しつつある交差点を左に曲がれば上本町、右折すれば中町、直進すれば本町になる。昭和二九年に江戸川乱歩を作家跡に案内し、生誕地碑建立の立役者になった岡村繁次郎はこの町で本屋を営むディレクターンであったが、その岡村書店も同五八年に姿を消した。

正直にいえばいいのに

「勘違いならびに思い込みの段を謹んで訂正し関係各位と読者のみなさんに深くおわびを申しあげたうえでさらに漫才は進みます」

「氣いつけなありませんよほんまに」

「けど勘違いや思い込みが生じるのも無理はないゆう場合もありますから」

「ないこともないでしょうね」

「たとえば名張市立図書館ですけど」

「まだなにかあるんですか」

「乱歩の生地にある公立図書館が乱歩関連資料を収集していると聞かされたらたいいていの人はその図書館が乱歩関連資料を収集しているんだなと思うはずです」

「はずですもなにもそう思うしかありませんがな」

「しかし実際には資料収集といわれてもなにをどうしたらいいのかさっぱりわからずそもそもなにを集めたらいいのかさえ見当がつかない状態で」

「そんなあほみたいな話がほんまにあるんですか」

「ほんまにあるんですけどそんなこと普通はわかりませんからたまに悲劇が起きたりします」

「悲劇ゆうたらえらいことですけど」

「悲劇の発端にあるのは自分が所蔵してる乱歩関連資料をその図書館に寄贈したらちゃんと活用してもらえるだろうという勘違いです」

「それ勘違いなんですか」

「まともに収集もできない図書館に活用なんかできるわけがありません」

「もしもその図書館に資料を寄贈したらどうなります」

「いきなり地下書庫に死蔵されて永遠に日の目をみることはありません」

「それではあかんがな」

「これを悲劇と呼ばずしてなんと呼べばいいでしょう」

「なんとかありませんのか」

「この悲劇の最大の犠牲者は慶應義塾大学なんです」

「あの慶應ですか」

「陸の王者ともリクルートの王者とも呼ばれているあの慶應です」

「どうゆうことですねん」

「慶應義塾大学推理小説同好会ゆうのがあります」

「慶應の学生さんの会ですね」

「大学単位で結成された推理小説研究会の第一号です」

「いわゆる草分けですな」

「評論家の紀田順一郎先生が今年『幻島はるかなり 推理・幻想文学の七十年』という回想記を出版なさったんですけど」

「もしかしたら紀田先生も」

「メンバーでいらっしやいました」

「そしたら紀田先生の回想記には同好会も出てくるわけですか」

「同好会のこともよくわかる紀田先生のご本は松籟社の発行で気になるお値段は本体二千四百円となっておりますのでどちらさまもぜひどうぞ」

「推理小説と幻想文学のファン必読の一冊ゆうことでしょうね」

「ついにてアマゾンで『伊賀一筆』もお買い求めください」

「そうゆう宣伝はいいですから」

「慶應義塾大学推理小説同好会にはOB会ゆうのがあります」

「大学卒業後も同好会の人がいるいろいろ活動してるわけですね」

「あるときのことですけど」

「あるときでいつですね」

「ざっと二十年ちよい前でしょいか」

「また古い話ですね」

「僕もくわしいいきさつは知らないんですけど名張市立図書館がそのOB会から推理小説関係の本や雑誌をご寄贈いただくことになりました」

「やっぱり名張市が江戸川乱歩の生誕地やからということだ」

「乱歩生誕地の公立図書館が乱歩関連資料を収集してるわけですから」

「ありがたいことやないですか」

「元衆議院議員の中井治先生に橋渡しをしていただいたらしいんですけど」

「中井先生はどんなご関係で」

「慶應義塾大学推理小説同好会OB会のメンバーでいらっしやいます」

「学生時代から推理小説が好きやっただけですね」

「現職代議士時代には移動の新幹線のなかで推理小説の文庫本をお読みになるのが常でいらっしやったそうで」

「つまり筋金入りですね」

「五年ほど前のことですけど」

「なにがありました」

「中井先生が週刊新潮にフライデーさ

れました」

「週刊新潮がフライデーゆうのも妙な話ですけど」

「お水のお姉さんと路チューしてるようにみえる写真が掲載されました」

「そういえばそんな話ありましたね」

「あれはお姉さんと映画をご覧になったあとのできごとやっただけですけど」

「映画ですか」

「ジュード・ロウがワトソン博士を演じて評判になった『シャーロック・ホームズ』という映画でした」

「やっぱり探偵ものですか」

「さすが中井先生は筋金入りの推理小説ファンやと大評判でして」

「そんなとこで大評判になってどないしますねん」

「でも田舎の図書館が乱歩生誕地というだけの理由で天下の慶應義塾大学からご縁をいただいたわけですから」

「ちよつとすごい話ですね」

「ところがすごいことにはまったくありませんでした」

「なんでですねん」

「名張市だもの」

「それもうNGワードにしませんか」

「OB会のみなさんには名張の図書館がちゃんとした図書館やという勘違いや思い込みがあつたわけなんです」

「乱歩の関連資料を収集してまっしる歩コーナーも開設してまっしる」

「ですから本や雑誌を寄贈したらしっかり活用してくれるであろうなと」

「誰かてそう思うはずですけど」

「図書館側もせっかくお話をいただいたんですから寄贈図書を活用することだ慶應大学のブランド力をおおいに活用させてもらたらよかつたんです」

「なんでしませんでしたん」

「名張市だもの」

「それはやめとけゆうてますがな」

「当時の名張市立図書館がなにを考えていたのかはよくわかりませんけど」

「もしかしたらなにも考えさせていただかないことにさせていただいてたん
とちがいますか」

「たぶんそのはずです」

「そのはずでは困りますがな」

「普通やったら慶應大学と縁ができたことをメディアを通じて大々的にPR
しますけどね」

「具体的にはなにをしますねん」

「館内に慶應義塾大学推理小説同好会
OB会ミステリ文庫と名づけた書架を
どーんと新設いたします」

「OB会から寄贈していただいた図書
を並べるわけですね」

「それだけではあきません」

「なにをしますねん」

「寄贈図書の体系化が必要です」

「体系化といいますと」

「まず寄贈された図書のリストをつく
ります」

「それは当然せなあかんでしょね」

「それが資料活用的一步です」

「寄贈を受けた側の責務でしょうし」

「慶應ミステリ文庫の書架を開設した
ら最低限そこにどんな本や雑誌がある
のかが誰にも簡単にわかるようにする
ことが必要になります」

「そのためのリストづくりですね」

「整理とともに分類も進めなければな
りません」

「なにをしますねん」

「ここに一冊の本があるとしたらその
本が海外作品か国内作品かとか著書が
誰であるのかとか」

「本を仕分けしていくわけですか」

「ばらばらに存在してる本を系統立て
て分類していくわけです」

「それが体系化ですか」

「それをしないことには何千冊の本が
あってもただ死蔵しているだけという
ことになってしまいます」

「名張市立図書館にはそうゆうことが
できないわけですか」

「まったくできないんですけどそれは
いったいどうしてでしょうか」

「名張市だもの」

「そんなことゆうてる場合ですか」

「うっかりつられてしまいました」

「名張市立図書館が最初から手前ども
は資料収集のしの字も知りませんと正
直にゆうてたらよかつたんですけど」

「それやったら勘違いや思い込みは生
まれませんか」

「僕もOB会の寄贈図書のことが気にな
ってしかたありませんので去年発行
した『伊賀一筆』の手記にもそのあた
りのことを綴りましてね」

「OB会のみなさんのご好意を無にし
てるわけですから」

「そしたらOB会のおひとりがメール
をくださいました」

「どんなメールでした」

「あの『地下で眠っている面々』をな
んとかしてくれないかと」

「図書館の地下書庫に死蔵された寄贈
図書に日の目をみせてやりたいと」

「こうなったらもう完全に市長責任が
問われる問題ですからねこれ」

「いきなりそこまで行くんですね」

(二〇一五・五・一五)



元町【もとまち】 旧称は瀬古手町。昭和七年、元町に改称した。せこは一般に迫または世古の字を当て、小路や横町の意。名張川の対岸に瀬古口という地名が残り、入口と出口の対をなす。本町の通りから入った路地には寺院が建ち並び、一帯は江戸期に寺町と呼ばれることもあった。明治四五年創業の農機具メーカー、高北農機が昭和四八年に町内から転出し、跡地には翌年、名張市内初の大店としてジャスコ名張店が開店した。老朽化にともなう郊外への移転計画は名張市と名張商工会議所の要請で中止され、商業施設リバーナの核店舗として平成八年、ジャスコ新名張店がオープン、同二三年にイオン名張店となった。リバーナは名張を逆に読んだ名称。人口は昭和五年に三六六人、今年三月には一五三人。写真は五月二三日に撮影。リバーナ屋上の駐車場から東の名張駅方面を俯瞰した。画面右下、丸福精肉店の一面にはかつて東映系の映画館があり、小学生のころに大川橋蔵の「新吾十番勝負」を見た記憶が残っている。区画に沿って右上につづく路地をたどると、中町にあった大映系映画館の前に出た。ずっと通学路にしていたが、高校生当時、渥美マリが主演した大映映画の大きな看板を眺めて、春情をもてあましながら通過したことをおぼえている。

ラッキーなこともある

「去年出した『伊賀一筆』の手記で読者のみなさんによくよくお願いしておいたんですけど」

「なにをお願いしました」

「怒ったり責めたりするのはやめたってください」

「いったい誰の話ですねん」

「名張市役所のみなさんです」

「名張市役所のみなさんがなにかしたんですか」

「そういう問題ではなくておつむのレベルが問題なんです」

「また身も蓋もない話になりそうですけど」

「われわれ名張市民にとっては名張市役所のみなさんのおつむのレベルの低さは周知の事実ですけど」

「ほんまに身も蓋もありませんな」

「げんに名張市の一般市民は名張市役所でお仕事してくれてる公務員のみなさんのことを心からの親しみをこめて役所のあほうと呼びしてるわけ」

「そうゆう市民もなかにはいますね」

「しかしわれわれ一般市民も名張市から一步外に出たら名張のあほうと呼ばれてるんですからどうぞご心配なく」

「誰が心配してますねん」

「そんなお役所の人たちを怒ったり責めたりしてみても甲斐がありません」

「のれんに腕押しですか」

「ですから申しわけないんですけど諦めてくださいと」

「なにを諦めます」

「名張市立図書館に乱歩関連資料のまとめた収集と活用を期待することは諦めてとつととお帰りくださいと」

「どこへ帰れゆうんですか」

「ただしラッキーなこともありましてね」

「どんなことでしょう」

「名張市には乱歩関連資料を必要としている市民がひとりもないんです」

「そんなことないと思いますけど」

「もちろん乱歩作品を読みたいという市民は存在しているはず」

「それやったら乱歩関連資料は必要なんちがいますか」

「そういった市民のみなさんのためには図書館の開架に乱歩全集をずらっと揃えとくだけで用は足りる」

「乱歩の本はいまでもいろいろ出てるみたいですよ」

「市民に読んでもらうためにわざわざ戦前に出た乱歩全集を購入する必要はありませんからね」

「でも図書館の乱歩コーナーには戦前の乱歩の本も並んでますけど」

「そのへんがわけのわからんところでして」

「といいますと」

「ただ古い本を買い集めて飾ってあるだけで収集の目的とか方針とかゆうのはなんにもないんです」

「あれ飾ってあるだけなんですか」

「つまり開設当時の図書館関係者はこれらの高校の図書委員よりもはるかにレベルが低かったということです」

「いまはどうですねん」

「おかげさまで終始一貫してはるかに低いレベルを維持しております」

「それではあかんがな」

「要するにここ名張市においては図書館長や教育委員長や教育長をはじめとした図書館関係者が高校生以下という低レベルのまま推移してるわけです」「さすがに高校生以下ゆうのはいいい過ぎやと思いますけど」

「ものごとをちゃんと考えようとする高校生となにも考えようとしなないお役所のみなさんとは明らかに高校生のほうがうえですから」

「考えたか考えなかったかはわかりませんがな」

「乱歩関連資料としてなにを所蔵しているかをみたら一発でわかります」

「そんなもんですか」

「火をみるよりも明らかにたなごころを指すがごとく明々白々の一目瞭然で疑問の余地なしに丸わかりです」

「またようけ並べましたな」

「ですから『伊賀一筆』の手記には名張市立図書館も開館のときから高校生を館長にして乱歩関連資料の収集を進めたらよかったのという反省点も記しておいたんですけど」

「高校生が館長で君そんな犬や猫に帽子かぶらしてそこらの駅長さんに任命するみたいなことゆうてますけど」
「できたら女子高生がいいなという希望も付記しておきました」

「知らんがな」

「十年ちよつと前のことですけど」

「なにがありました」

「当時の教育委員長でいらつしやった辻敬治さんから図書館における過去の内部事情を教えていただきました」

「教育委員長ということになると一般市民の知らない内部事情もくわしくご存じでしょうね」

「名張市立図書館は一九六九年に開館いたしました」

「場所は丸之内でしたな」

「それが一九八七年に桜ヶ丘の現在地に移転しました」

「立派な図書館が新築されました」

「そのとき館内に乱歩コーナーも設けられました」

「乱歩の遺品とか著作とかが展示されます」

「その乱歩コーナーに関する図書館関係者の協議検討ゆうのが無茶苦茶なものやったんです」

「なんや無茶苦茶ばかりですけど」

「辻さんからいただいた文書はいまでも僕のウェブサイトで公開してるんですけど」

「インターネットで発信ですか」

「決まったことが四点ありました」

「ちゃんと考えてくれてますがな」

「まず一点目が『予算の許す限り資料の収集を続ける』ゆうことでした」

「それでええのところがいますか」

「なにを収集したらええのかも考えられへんような人間が資料の収集をつづけますてそらどうゆうことやねん」

「僕にいわれまして」

「けどそこらの高校の図書委員でも普通に考えられることをまったく考えられなかったからゆうて当時の図書館関係者を怒ったり責めたり実名さらして罵倒したり死ねばけとかゆうたりするのはやめたってほしいんです」

「君ええだけやってますがな」

「残りの三点もおよそ資料収集の本質からかけ離れた支離滅裂な内容で」

「本質が理解できていないんですか」

「辻さんの文書にはほかにあきれ返るようなことが書かれてましてね」

「どんなことでした」

「資料の収集となると莫大な資金が必要となる」

「莫大な資金ですか」

「市内に乱歩の資料が残されているだろうか」

「もひとつようわからん話ですけど」

「ここで確認しておきますと図書館が収集する資料はまず本や雑誌です」

「乱歩関連資料とは乱歩に関連のある本や雑誌のことであると」

「ですから莫大な資金が必要だというのはちょっとおかしな話でして」

「市内に乱歩の資料が残されているだろうかゆうのも妙な話ですけど」

「つまり図書館関係者には図書館の収集する資料は図書であるということが理解できていなかったわけです」

「そんなあほな」

「図書館の資料は読むものであるという基本的なことがまるでおわかりになつてなかったんですね」

「図書館関係者の人がですか」

「したがいまして資料を収集するゆうても展示品とか陳列物のことしか頭に浮かびません」

「展示陳列ゆうことになるものによつたら莫大な資金が必要になるかもしれませんね」

「図書館の資料についてなにも理解できてませんから展示陳列する資料が市内に残っているだろうかとか意味不明なことでも悩むわけです」

「本や雑誌の収集のほうはどうなつてますねん」

「いうまでもなく無茶苦茶です」

「またそれですか」

「乱歩に関係のある古本をただやみくもに買い集めただけでした」

「収集した資料の体系化は」

「図書館関係者にはアーカイブとかデータベースとかそうゆうものがまったく理解できてませんから」

「そんな状態ではどこにもラッキーなことなんかありませんがな」

「乱歩関連資料は市民生活にいつさい関係ありませんから図書館による収集が無茶苦茶であつてもそれを市民から批判される心配がありません」

「それがラッキーなことなんですか」

「しかし全国に視野をひろげたら乱歩関連資料を必要としている人はいるわけですし名張の図書館に関連資料を寄贈してくれる人もいらつしやいます」

「慶應義塾大学推理小説同好会OB会のみなさんとかですな」

「ところがあいにくなことに名張市立図書館にはなにもできません」

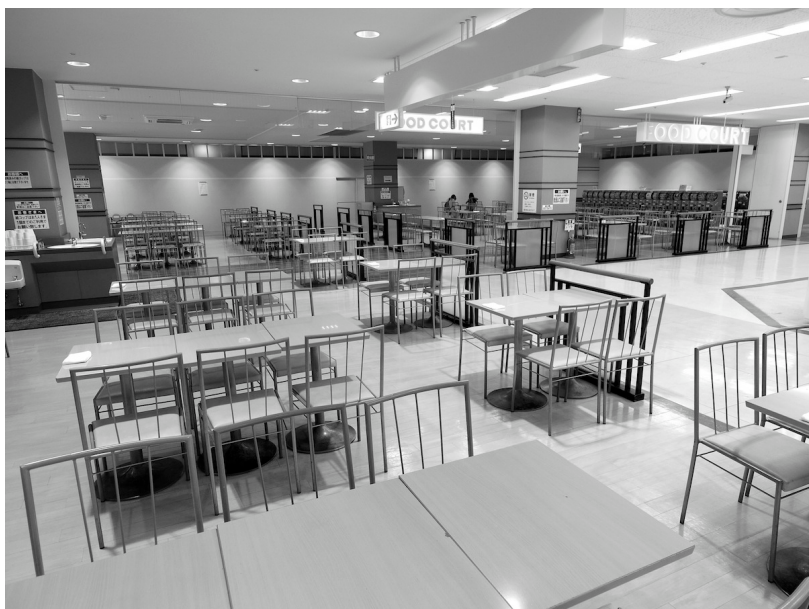
「収集の方針も決められなければ集めた資料の体系化もできませんと」

「でも役所のおほとと呼ばれてるような人たちなんですから怒つたり責めたりするのはやめたつてほしいんです」

「いったいどうなりますねん」

「市長責任が問われるわけです」

「やつぱりそこ行くんですか」



リバーナ [Riverna] 昭和四十九年三月二十九日、
もともち
元町にジャスコ名張店がオープンした当時のことはまったく知らない。土地を離れていたからである。それでも、突如として異空間が出現したような騒ぎになったのではないかと察しはつく。翌年の国勢調査によれば、名張市の人口は三万四九二九人。草深い田舎まちはジャスコの誕生によって初めて流通革命を経験し、大量消費時代の入口に立った。平成八年四月二二日、のちにイオン名張店となるジャスコ新名張店を核店舗としてリバーナが開設されたが、さすがに大型店は珍しいものではなくなっていたから、騒いだり驚いたりする市民は一人もいなかった。最近ではむしろ、いつのまにかテナントが撤退していることに驚かされる。リバーナから去ったのは、サティワンアイスクリーム、マクドナルド、と数えてみても、すべてはとも思えない。写真は六月七日に撮影した。日曜の午前、三階にあるフードコートだが、画面奥で営業していた店舗二店がそろって廃業していたのにはびっくりした。がらんとしたフードコートに残るのは、いまや名古屋に本社を置くスガキヤだけ。そういえば本誌八頁に記した名張駅前のつば八も、あつというまに閉店してしまった。わずかに二、三回、飲んだだけであつたが。

ワレ地上戦二突入ス

「あれよ」

「なんですんねん」

「あれよあれよ」

「どないしました」

「あれよあれよとゆうてるまに時間が過ぎてしまってます」

「そんなこと知りませんがな」

「五月二十五日を最後にこの漫才がほつたらかしになつてしもてたんです」

「五か月のご無沙汰ですか」

「五か月プランクがあると漫才のネタがええだけ古くなつてまして」

「ネタは新鮮さが命です」

「しかもこの五か月のあいだには大きなニュースが相次ぎました」

「たとえばどんなニュースでした」

「福山雅治さん結婚ッ」

「芸能ニュースはいいですから」

「でも名張市や伊賀市のニュースにはろくなものありませんから」

「たしかに騒動つづきゆう印象です」

「名張市の騒動といえはその筆頭は都市振興税問題」

「名張市は財政難なので固定資産税を値上げさせてもらいますゆう話で」

「九月議会でのための条例改正案があつさり可決されました」

「ほんまにあれよあれよとゆうてるまでしたけど」

「あまりにも展開が早いのでこの漫才ではついていきませんでした」

「市議会議員の行政視察の問題もどつかへ飛んでいつてもた感じですね」

「名張市議会の柏元三先生が問題提起をなさつたわけですけど」

「いまやずいぶん昔のことのような印象で」

「ネタとしては鮮度を失つてつかいものにならなくなりました」

「でもそれではまづいのとちがいますか」

「どうしてでしょうか」

「君あの件であつちこつちにメールを出してご厄介おかけしましたから」

「たしかに名張市議会の事務局にメールをお出したしました」

「それは迷惑至極な話ですけど」

「教育民生常任委員会の幸松孝太郎先生や富田真由美先生や三原淳子先生や森脇和徳先生からはご丁寧にご回答をいただきました」

「ご多用中ありがたいこととして」

「残念ながら三原先生と森脇先生のご回答は漫才のなかで発表することができなかつたわけなんですけど」

「ご迷惑をおかけしたうえにそんなことではあきませんがな」

「けど名張市は都市振興税という名目で固定資産税を増税せなやつていけんほどの財政難なんですから市議会議員の行政視察がいまのままでいいのかゆうのは大事な問題なんです」

「それはたしかにそうです」

「そこの先生がたが『10月29日、武雄市に、我が清風クラブ（5名）と公明党（4名）で視察に伺います。内容は、もちろん「図書館」と「教育委員会改革」です」とかゆうとつてええのかどうか。なお右の引用ではあほみたいな顔文字を省略いたしました」

「いったいなんの話ですんねん」

「佐賀県の武雄市が図書館の運営をツタヤに委託したところいろいろな問題が出てきました」

「ツタヤゆうたらあのDVDのレンタルとかもしてる本屋さんですか」

「三年ほど前にツタヤ名張店もできたんですけどほぼ一年で撤退しまして」

「そのツタヤが図書館ですか」

「武雄市長やつた樋渡啓祐先生が強引に話をお進めになっておとしの春に開館しましたところ全国的な話題になって入館者も大幅に増加しました」

「よかったやないですか」

「ところがここへ来て運営面に致命的な問題のあることが週刊誌や新聞で批判されはじめました」

「それではあきません」

「武雄市につづいて神奈川県の高老名市でもツタヤと組んだ図書館がオープンしたんですけど週刊プレイボーイの記事によりますと『フーズク紹介から付録メイン本：大騒動のツタヤ図書館は海老名でも恥の上塗り！』」

「なんですんねんそれ」

「愛知県の小牧市でも図書館のツタヤ化計画が進んでたんですけどあれこれ問題が伝えられるようになりましたのでツタヤ図書館は是非かという住民投票が実施されました」

「結論はどうでした」

「反対が多数を占めました」

「市民はノーを突きつけましたか」

「ツタヤが武雄市図書館で試みた図書館運営モデルは破綻しているという認識がひろがりつつあるようです」

「図書館の新しい運営手法にチャレンジしてみましたけど失敗でしたと」

「ところがそんな武雄市に視察に行くという話がありましてね」

「もしかしたらさっきの話ですか」

「樋渡啓祐先生のフェイスブックに名張市議会の福田博行先生が十月二十九日に武雄市に視察に伺いますと投稿していらつしやいます」

「清風クラブ五人と公明党四人の合計九人の先生ゆうことですけど」

「税金をつかつてはるばる九州まで失敗例を視察にいらつしやるんです」

「図書館のほかに教育委員会の改革という視察テーマもあるそうですけど」

「自分たちの手で議会改革もようせんような無能な議員が教育委員会改革とかいつちよまえなこと抜かしとつたらしまいにしばき倒すぞおッ」

「急に怒り出さんでもよろしがな」

「あれよ」

「あれよ」

「え」

「あれよあれよ」

「またそれですか」

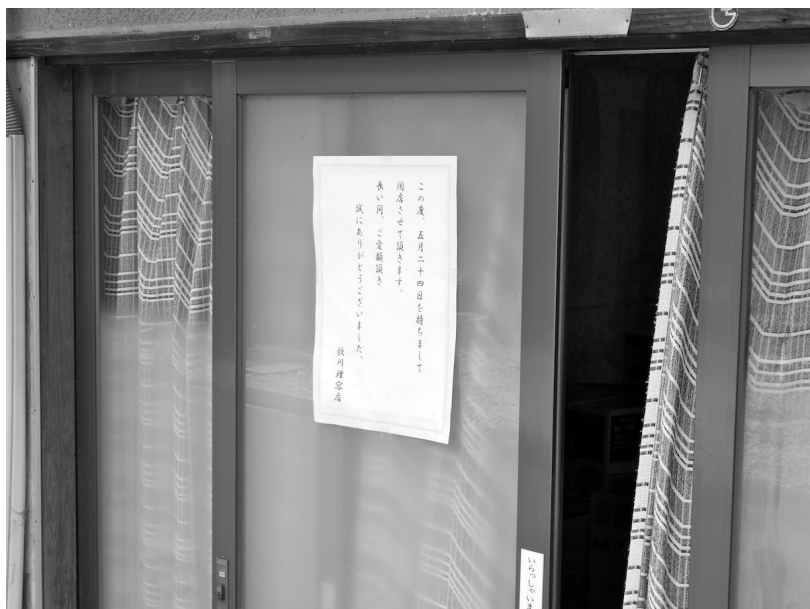
「ほんまにあれよあれよとゆうてうちに時間切れでございましてメインテーマの図書館戦争もどこへやら」

「まただからだとあほなことしゃべっただけで申し訳んですがな」

「そこでインターネットから紙媒体へ移行して名張市で発行されている伊和新聞というローカルメディアを戦場とした地上戦に突入していることをお知らせしてはるかブラジルの空からチャウとお別れを申しあげます」

「それどこのブラジルですんねん」

(二〇一五・一〇・二〇)



神町「さかきまち」宇流富志禰神社一の鳥居が

建つ交差点から北に伸びる町筋が神町である。宝曆一三年（一七六三）完成の『三国地誌』は同神社の項に「今築瀬ニ神町アリ土俗相伝フ神護景雲年中常陸国ヨリ遷幸ノ時先驅ノ神ノ枝ヲ御鎮座ノ後此地ニ衝植シカ遂ニ根ヲ生シテ繁茂シ近古マテ其本アリ因テ町ノ名トナリシト云昔ハ此アタリマテ社地ニテ俗ニ所謂馬場サキナリ故ニ神町ノ入口ニ大鳥居アリイツノ比廢セシヤ其由ヲシラス礎石今尚存ス」と記すが、武甕槌が常陸から奈良に遷し祀られて春日大社が創建されたとする遷宮伝承に関連させた記述は信じがたい。『三国地誌』が編纂された時期、一の鳥居は本誌四頁に記した事情で存在しておらず、礎石だけが残っていた。築瀬は中世以来の村名だが、明治一三年、築瀬よりも知られていた通称の名張に改称され、同二二年に町制を施行して名張町が誕生した。江戸中期の地誌『伊水温故』には「上野口ヲ神町ト云」とあり、築瀬村の伊賀上野方面のはずれが神町であった。近代には中町からつづく中心商店街として栄えたが、いまや繁盛しているのは番じや屋敷という名前の飲み屋だけ。人口は昭和五年に一七一人、今年三月には五九人。写真は六月二八日に撮影。廃業の挨拶を貼り出した床屋の玄関である。

しやらしませんねて

地域雑誌「伊賀百筆」第二十五号に《「伊賀百筆」の付録雑誌として「伊賀別筆」を発行する予定だったのに発行できなくなつてウェブマガジンに移行した件についてお知らせ申しあげます》という長々しいタイトルの記事を掲載していただいて広くご案内を申しあげましたとおり、「伊賀百筆」付録雑誌「伊賀別筆」発行計画は時間不足のため無惨にも頓挫し、やむなく電子雑誌に移行いたしました。

年刊の雑誌では地域社会のためまぐるしい動きを逐一フォローしてゆくのが困難である、というのも頓挫の要因で、早い話が、表紙に記した《なばりしは やくざに やさしい まちづくり》も《おやくしよは みうちに やさしい しみに きつい》も、旧聞に属する話題になつてしまったため漫画の素材として誌面に登場させることができませんでした。とはいへ、名張市が導入を決めた都市振興税もまた、身内にやさしく市民にきつい施策のひとつかもしれない。

伊賀地域最高の知性にして伊賀地域最後の良心が贈る爆笑漫才「僕の図書館戦争完結篇」と、静かに静かに死に絶えつつある名張のまちを題材にしたフォトエッセイ「名張はどうしてくれてますのどな」とが本誌の二本の柱ですが、どちらも中途半端なまま発行に至つたことを遺憾といたします。ご協力をたまわつた関係各位に心から謝意を表しつつ、関係方面には深くお詫びを申しあげます。お詫びといつても口先だけであることをご承知おきください。ほんまにもうしやらしませんねて。

（雄鶏屋ほんだわら）

<http://www.e-net.or.jp/user/stako/20151101.pdf>

伊賀別筆 Iga Beppitsu

創刊兼終刊号

2015年11月1日発行

発行所

名張人外境

e-mail address: stako@e-net.or.jp

第1号

責任編集 中相作改メ雄鶏屋ほんだわら

誌面設計・組版 犬の小春

協力

名張市教育委員会事務局

名張市議会事務局

幸松孝太郎

富田真由美

三原淳子

森脇和徳

（敬称略）

この雑誌はウェブマガジン（電子雑誌）です。紙媒体ではなく、PDF形式で配信しています。ダウンロードしてB6判の用紙にプリントすることができますが、そこまでしていただくほどのものではありません。

伊賀一筆

Iga Ippitsu

第1号

Curious novel ノ第一ノ特徴ハ苦イ戦慄ニアルコトヲ知ラネバナラス。

オモナナイヨウ

奇譚

大正五年春、早稲田大学卒業を七月に控えた満二十一歳の乱歩が、少年期以来の愛読書を語り、みずみずしい文学観を綴った手製本『奇譚』を活字化しました。春浪、涙香から、ボーとドイルを経て、ルルー、ルブランまで、乱歩を探偵小説に導いた文学的水脈をつぶさにたどることができます。名張市立図書館が平成十五年に発行した『江戸川乱歩著書目録』を増補しました。没後第四次の全集三十巻はうに及ばず、愛知県の県史からコロンビア大学の教科書まで、乱歩作品が昨までの十二年間にどう受容されたかを概観できます。「伊賀の国の風俗、一円実を失ひ、欲心深し」(人国記)。三重県の北西部に位置する伊賀地域は、いつもとつてもすつとこどつこいです。

目録

伊賀

タイセツナオシラセ

What hā Wī...ancing mad!
...man bec...
in "Gold Bug"
...カス事ニヨッテ
...フニハ
...モノヲサヘン
...成デハナイノダラウ
...二説シタモノ
...訳ノ為流暢ヲ失ツタ
...律ヨリ生ズル
...リノ作ハメモノハナカ
...反シテ精神的タルト物質的タルトヲ間ハズ
...ナル又 plot ノ奇ヲ主眼トスル文学ハ読ム
...バカリデナク興味ハ巻ヲ置ク能ハザルモノ
...ノアル為カ今日迄僕ハ内的文学ノ専キコトヲ
...モ、多クハ plot ノ奇怪ナル romance ニ趣ツ
...学(世人ノ以テ真ノ文学ナリトナスモノ)ハ
...神ノ糧トナリ、plot ラ主トスルモノハ主トシ
...トナル。
...ハ仮リニ curious novel ト称スル。Thrilling

奇譚(抄) 本文見本(p.2「Preface」の一部)

表紙写真 石塚公昭(人形+オイルプリント)

伊賀一筆

第1号



乱歩生誕120年
奇譚(抄)
江戸川乱歩

創刊兼終刊号

伊賀一筆 第1号

創刊兼終刊号

2014年12月10日発行

判型 A5判

頁数 224頁

定価 2,000円(税込)

発行所 名張人外境

奇譚(抄)

伊賀一筆 第一号 目次
のれんわけ始末記
伊賀国、伊賀市、伊賀地域
伊賀市地名考
僕の図書館戦争(アバウトなところ)
続・僕の図書館戦争
新・僕の図書館戦争
江戸川乱歩著書目録 2002-2013
新・僕の図書館戦争(ふたたび)
奇譚と彼と
ボーと乱歩 奇譚の水脈
野心を託した大探偵小説
生誕百二十年 色あせぬ乱歩の世界
名張不機嫌評判記
*
江戸川乱歩 1 二一〇

「伊賀一筆」第1号はオンライン書店 Amazon.co.jp だけで取り扱っております。

すべて 伊賀一筆

検索

おそれりますが、検索してボチ、をお願いします。